

和音の本音

KAZUNE SHIMIZU - TRUE NOTES

著者・文＝青澤隆明
Izumi Takahira Asouma

#5

「みんなに肯定されて生きてきた、それが幸せの要因だね。」

との折り合いをつけなくてはならない。とにかく、清水和音は自然に音楽の道に進んだ。他にも可能性はあったに違いないが、結局はずっと音楽の世界で生きてくることになった。つまりは、最初から音楽家だったのだ。

親父の気まぐれから、音楽家人生が始まった。

「いや。それは多くの問題じゃなくて。この名前をつけた親父も、もう82歳になつて。昨日も演奏会を聴きにきていたけれど。」

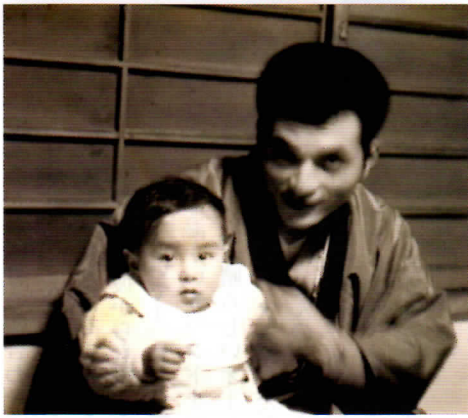
人生の終わりに近づいていても、親父はハッピーで「自分の人生はほんとに楽しかった」「死ぬのはなんにも怖くない」とか言っていて、ほんとうになんでもなさそうなわけ、精神的に。いまだに息子のことが自慢でしやうがなくてね。

親父の実家は京都の織物屋で、西陣織の帯をつくっていた。音楽的な環境はかけらもなく、家を継ぐのが当たり前みたいな雰囲気なのか、親父は次男だったから、そこから逃れたい一心で堀川高校に行った。要するに、親父は音楽をやりたかったというよりも、織物屋にならなかった、ということらしい、どうや

ら(笑)。

で、京都にもいたくなかった。だから、やめる理由を一所懸命考えたんだろうね。西陣の町にいて、その仕事をしないがための方便で、自分は音楽をやるって言つてうそぶいたわけですよ。それで、音楽をやると言ったら、ピアノを買ってもらつて、牛がピアノを引いてきたつていう、そんな時代だよ(笑)。

親父は昭和10年、1935年生まれだ



1歳5ヶ月の清水和音
父親とのツーショット

から、ピアノがきたのが1950年くらいの話で、もちろんアップライト。たいへんな時代だったけど、京都は戦争で残ったからね。

でも、堀川高校に行つたからには、親父もなにかしらやっていたわけで、なんか音楽が好きだったんだろうね。なにを間違つて音楽を始めようと思つたのか、これはいまだに謎なわけで、よくわからない……。

だけど、「高校生くらいでピアノ買ったからつて、おまえが音楽家になれるわけないだろう」つて、ほくのおじいちゃんが言つて。「帯屋の息子が音楽をやるって言つたつて、いったいどうやって生きていくんだ。もし音楽をやるんだつたら、おまえにこどもができたときに、その子に期待するしかない。こどもができたら音楽をやらせればいい」。そう言われたことを、親父が忠実に守つて、ほくが迷惑を受けた、そつうい話だよ(笑)。それでほくにこの名前がついちゃつた。

言つてみれば、親父のわがままというか、気まぐれというか、そつういところからほくの人生ができたんですよ、たぶん。ほくの人生は音楽に決められちゃつたわけ。ほかのことをやっていたら、大

音楽のはじまり

人は生まれながらにして人である。人の間に生まれ、人の間に生きる。人間、とはうまく言つたものだ。

では、音楽家もまた、生まれながらにして音楽家なのだろうか？ かつて職業は世襲が多く、音楽家が職人だった時代は、職業音楽家もまたその家系に生まれ、た者たちの仕事だった。

さて、清水和音である。この名前ももちろん、彼が音楽家として活躍するより前につけられた。親の思いはありがたい場合もあるが、子にしてみればある意味、名前が呪縛のようなものでもある。意識もしない幼い頃から、自分を指す呼び名